

龍 秀美

私が選考委員を務めてから今年で3年を迎えたが、現在の短詩形文学の有りようを一つの鏡のように見せてくれる「口語詩句」はますます貴重な場と感じる。一年を通じて考えてきたことは、作品が単独で一人歩きをするとき、どんなところにポツンと置かれても「文学作品」であるという独立性を持っていること。そのためにはどうあるべきか、ということだった。

これまでの短詩の歴史では多くの場合作品に「題（タイトル）」がついており、そのためその作品が「詩」であるということを表すことができた。また「題」は俳句の季語や短歌における調べのようにポエジーを収斂させて作品化する働きもあった。しかし「口語詩句」にはそれが無い。結局掘って立つところは、その内容と「文体（スタイル）」の結びつきが、ゆるがない必然性を持っているということではないだろうか。

新人賞は、まちりこ（埼玉県）と翠（東京都）の対決となった。成熟した大人二人の圧倒的な質と量と内容の多様性は納得いくものであり、現在の文芸の有り方にある種の安堵感を覚えた。

年間を通して私は、選考時に姓名も年齢も、まして「いいね」の数など見ないのだが、選考を終えて知ったのは、まちりこに付いた「いいね」の数が群を抜いていたことだった。多くの読者の感性に訴えることは、やはり優秀さの証しだろう。この選考システムの示す面白さのひとつではないだろうか。

これも後になって知ったことだが、私はずっと、その語感の柔らかさとあふれ出る感情の自由さから、まちりこを女性だと思っていた。これも新鮮な驚きのひとつだった。

また伝統的な短歌や俳句に縛られてはいないが、各作者の最も密接なジャンルは推測できる感じがあり、私の憶測ではあるが、その割合は短歌3人、俳句2人、詩3人だった。このように拮抗する人数は「口語詩句」がバランスよく幅広いジャンルから応募されていることを表し喜ばしいことだと思った。

以下、印象に残った作品を作者ごとに挙げてみる。

まちりこ（44歳・埼玉県）

まだ満足に歩けない子が／緩やかな／カーブを曲がるよ
うなかなしみ

息子からオモチャの剣で／斬られてる／明日は早朝会議
のある日

耐えきれず湖で泣く／母さんが祖母を母さんと／叫んで
いる

――短歌のリズムを基本としながら、二行、三行、四行
と新しいリズムを刻む。明治に新しい定型詩を作ろうと
した蒲原有明を思い出した。

翠（35歳・東京都）

はねる髪を／とがして、ゆわく。／法律も／こういうこ
とが／したいのでしょうか？

花の名を／たくさん知ってる／いじめっ子

五味はこ（29歳・神奈川県）

鉄塔に展翅されゆく春茜

歌集読む春の付箋紙買い足して

火鯨研（26歳・熊本県）

世界中のひまわりは／ゴッホの影響を受けている

こわい人もその一日の終わりには／ふとんに入るのだけ
らかわいい

山本先生（27歳・東京都）

春に蓋してワセリンの厚くある

藤色（23歳・京都府）

妹の眉毛をととのえてやり知る秋

春だねだったか針金だったか／言いのこして消えた

豊富瑞穂（19歳・茨城県）

天国の心あたりを聞くように／プールの底へ触れたゆび
さき

それをする　ふつうに泣くよりも／わたしを失わない泣
き方がある